

論文要旨

学位論文題目 食からの子育て支援に向けた授乳状況に関する研究

氏名 島本 和恵

離乳期は、乳汁栄養のみでは不足するエネルギーや栄養素を補いながら摂食機能を発達させる役割を担う固形食を摂取する。乳汁栄養の摂取状況は固形食の摂取量に影響を与えるが、離乳期以降の乳汁栄養の継続状況や与え方とその背景にある要因は明らかにされていない。本研究では、「授乳・離乳の支援ガイド」（以下、日本のガイドライン）に掲載のない離乳期以降の母乳の栄養価の知識や自律授乳に着目し、これらを要因と考えて検討した。そして、授乳状況などの母子の個別性に応じた最適な固形食摂取のための授乳方法への支援を目的とした。さらに、母乳の継続状況や、母乳の与え方に関する要因と保護者が持つ児の食行動の悩みとの関連を検討することにより、食を通じた子育て支援に貢献することを目指した。

研究1は、日本のガイドラインに沿って離乳食を進める児の乳汁栄養の摂取状況と、発育・発達に必要な栄養素の補完や身体発育、および口腔内状態・機能との関連を把握することを目的として、日本の児に限定した系統的レビューを行った。口腔内状態およびその機能は、離乳期以降の乳汁の摂取量や方法と関連がみられた。母乳を多量摂取すること、人工栄養の児の場合は、哺乳瓶を使用して乳汁以外の飲料を摂取することにより、固形食による口腔機能の訓練の不足が推察された。つまり、乳汁栄養の摂取状況によっては、口腔機能の発達が妨げられる可能性が危惧された。栄養素の摂取状況は、1歳未満の人工栄養の児は母乳栄養や混合栄養の児に比べて摂取量や充足率が最も高かった。他方、人工栄養の児でも、1歳以降は鉄、ビタミンDの充足率を満たしていないことが明らかとなった。身体発育値は人工栄養の児に比べて母乳栄養の児がやや小さい傾向であったが、個人差や人工栄養の成分組成の影響も推察された。

研究2～4では、1歳6か月児歯科健診対象児の保護者581名に対し、質問票を用いた調査を行った。有効回答数は555名であった。研究2では、乳汁栄養の継続状況と授乳の目的や夜間授乳との関連を検討した結果、1歳6か月児健診対象児の約1/3が授乳を継続している実態が明らかとなった。加えて、母乳は乳汁栄養法の中で有意に多かった。さらに、継続群では母乳の割合が有意に高く8割以上であり、母乳育児の長期化が明らかとなった。これらの背景には、2002年に母子健康手帳から「断乳」という表現が改められたことと、2009年から活用されている日本のガイドラインでは、卒乳時期の判断を母親に委ねたことが要因として推察された。他方、世界標準であるWHOのガイドラインは2歳までは母乳育児を勧めており、本研究の母乳継続児の卒乳時期が遅い訳ではないと考える。母乳は免疫に関する物質も含んでいることから、母乳育児は災害時の感染症疾患による2次的健康被害から乳幼児の生命を守るといえる。よって、日本の母乳育児の長期化を肯定的に捉える必要がある。また、小食と関連のある「寝かしつけ等の授乳」「夜間授乳」といった与え方（以下、与え方）は継続群に有

意に多かった。他方、身体発育値と授乳の継続状況との有意な関連はみられなかったことから、継続群は小食だが、エネルギーは摂取していることが推察された。

研究3では、研究2をふまえ、小食と関連のある母乳の与え方に関する要因の検討を目的とした。まず、保護者の母乳の栄養価についての知識と継続状況、与え方との関連について検討した。母乳の栄養価は離乳期以降もほとんど変わらない。しかし、本研究の母乳の栄養価についての正答率は2割であり、周知されていないことが明らかとなった。母乳の栄養価の知識と継続状況との間に有意な関連はみられなかった。一方、継続群の9割以上を占める母乳や混合栄養を与えている保護者の母乳の栄養価の正答率も2割に満たず、保護者は栄養価を知らずに授乳していることが明らかとなった。よって、離乳期以降の母乳の栄養価の正しい知識を周知させる必要があると考える。次に、離乳期以降の自律授乳の規則性と母乳の継続状況と与え方との関連を検討した。「児の欲するまま」に与える自律授乳であるが、授乳の時間が決まっていた「規則授乳」は43%であり有意に卒乳群に多かった。他方、57%は「不規則授乳」であり、「規則授乳」に比べ授乳回数が有意に多く、空腹時以外に授乳されている可能性が推察された。その結果、生後6~8週以降に整った自律授乳のリズムが乱された状態で離乳期に移行し、空腹のリズムが形成されず、小食となることが推察された。以上のことから、児の発育・発達に必須である固形食量の確保のためには、母乳の正しい栄養価が周知されていないことをふまえ、離乳期以降は「規則授乳」が最適であることを啓発する必要があると示唆された。そのためにも、児は空腹以外の不安・不快といった情動状況も泣いて伝えることを助言する必要があると示された。

研究4は、食を通した子育て支援に資するため、研究2、3で明らかにした保護者の母乳の栄養価に関する理解、自律授乳の規則性、母乳の継続状況と保護者の児に対する12項目の食行動の悩みとの関連を検討した。母乳の栄養価に関する理解と食行動の悩みとの関連では有意な差はみられなかった。しかし、「よくかまない」は母乳の栄養価を正答した保護者に多い傾向であった。母乳や混合栄養の与え方によっては、固形食の摂取量が少なくなり、咀嚼の練習不足となることが考えられた。これは、研究1の結果の裏づけと考える。栄養価の正しい知識があっても、固形食によって口腔機能や咀嚼機能が訓練されることが知られていない可能性がうかがえた。自律授乳の規則性と食行動の悩みとの関連では4項目に有意な関連がみられた。3項目は空腹状態でないこと、1項目は不規則な授乳や間食内容によって形成された食習慣に起因していることが推察された。母乳の継続状況と食行動の悩みとの関連では8項目に有意な関連がみられた。母乳卒乳群は口腔機能に起因する項目のみであり、空腹状態でないことに起因すると推察される項目はすべて継続群であり、母乳の継続状況の違いに悩みの特徴が示された。よって、母乳の栄養価に関する正しい知識、そして母乳の継続状況に関連する自律授乳の規則性の啓発は、食を通した子育て支援に貢献することが示唆された。

以上、本研究から得た新たな知見は、授乳状況などの母子の個別性に応じた最適な固形食摂取のための授乳方法の支援に有用であると考えられる。